



福島原子力事故関連情報アーカイブ

FNA

Fukushima Nuclear Accident Archive

Title	被災地からの脱却を目指して
Alternative_Title	Overcoming the situation in disaster area
Author(s)	遠藤 雄幸(川内村長) Endo, Yuko(Kawauchi-mura Village Head)
Citation	第 54 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集, p.167 54th Annual Meeting on Radioisotope and Radiation Researches
Subject	セッション：福島への復興の鍵と放射線関連学術団体への期待
Text Version	Publisher
URL	http://f-archive.jaea.go.jp/dspace/handle/faa/141730
Right	© 2017 Author
Notes	禁無断転載 All rights reserved. 「第 54 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集」のデータであり、発表内容に変更がある場合があります。



パネル討論3(1)

被災地からの脱却を目指して Overcoming the Situation in Disaster Area

川内村長*

遠藤雄幸
(ENDO, Yuko)

日本の原風景を残す当村は、あの日以来「被災地」と呼ばれる地域となった。全村民が避難したことで、家族や仲の良かった隣近所、友達までもが離ればなれになり、現在の帰村者は約80.3%、2,173名（4月1日現在）。この数字は本来20年～30年以上先の推定人口であり、一気に20数年後の未来を目の前に突きつけられている。加えて、子どもを持つ世帯など若い世帯が利便性の良い避難先に定着しつつあり、帰還した多くの世帯は高齢者が多く、人口減少と併せ少子高齢化が急激に進んだ。

村民は一瞬にして多くのものを失い、避難を余儀なくされ不安な生活を経験してきた。先行きが見えない中、漠然とした喪失感と閉塞感で心身ともに極度のストレスを感じてきた。何を信じていいのか分からない状況の中で行政への不信感が蓄積し、復興の足かせとなってきた。さらに、戻る人・戻らない人、20^キラインを境に賠償問題で住民感情も複雑になった。見えない放射能に心も体もズタズタにされた。それでもかけがえのない「ふるさと」を取り戻すために、この6年間戦い続けてきた。

里山があり、川があり、棚田があり、春には田植え、山菜を摘み、秋にはキノコを採り、コメの収穫が終わると正月用の自家製どぶろくを仕込む。春と秋年2回、鎮守様のお祭りが代々受け継がれ、部落の持ち寄り料理が運ばれてきた。消防団に入って火事の現場に駆けつけ、婦人会、農協婦人部や商工会青年部を通して、地域特有の産業を学び、先輩方との付き合い方を教えてもらい、そしてそれを次世代に紡ぐことが担い手であった。

一つの小学校中学校があり、そこに通い、同級生がいて、親がしてくれたように自分の子供をその学校に通わせ、無意識に地域のアイデンティティを身に付けてきた。これら全て地域の中で培われ循環してきた。農山村はそういう循環の中で支えられてきた。そこに農山村の豊かさの根源があり、おそらくこのような地域を「ふるさと」と呼ぶのかもしれない。それを取り戻すために最大限努力していく。

急激な人口減少と少子高齢化が進み、被災地は生き残りに向けて次のステージに突入しつつある。復興を果たすとともに将来をイメージした村づくりにも同時進行で取り組まなければならない。被害者意識だけでは問題の解決にならないのは自明であり、さらに時間の経過と共に被災地や被災者を見る目は多様化している。少なからずその眼を意識しながら復興を進めていくことは大切である。また、実際に被災地に足を運び実情に触れてもらうことが重要で、そうした目が被災地の住民に新たな気づきをもたらすに違いない。

本当に復興を成し遂げようとするなら、「被災地」という不幸にいつまでも甘んじているわけにはいかない。復興へはまだ道半ばだが、村民をはじめ多くの村内外の支援者と力を合わせ、新たな川内村を創造し、いち早く「被災地」から脱却することが双葉郡の復興ひいては福島県の復興にも繋がると考えている。

* Kawauchi-mura Village head